



る。ドミヤ降りの中で、今宮高校との練習試合の時だったが、あの時自分のシユートを用いて成功して勝った時のうれしさは、三年間のクラブ生活の最高頂だった。

## 苦しかつた思い出

浅野朝子

思い起こすと、ハンドボールとか言う競技を初めて知ったのは、確か一年の終り頃だったと思います。同じクラスにハンドボール部に所属しているという人があり、いつか放課後になるとクラブの主たる人物と思われ、女性が一二人、日練習に参加するようになり、とくにうみをかさにやってくる。するとその度に、彼女はいやな顔をしながらも承知していた。ある日何となく彼女に「ハンドボールでどんなことをするの」と聞きました。彼女曰く「け、可走り乍らボールを投げたり、うけたり、キーパーにとられたいように、ゴールに投げ込んでりするのよ」と教えてくれました。これに私にとって、漠然とハンドボールについて知識を得た最初でした。彼女が「これにやめたそうだが」というふうにして、内にはウインタースポーツとして、クラブス対抗の試合があり、私もそれに引っぱ

り出されました。その時のコートは現在男子が行っているフィールド競技だった。で、一年生の私達は、夢中で広いグラウンドを走りまわっていました。

試合後、男女クラブの多分二年生の幹部の人達にクラブへの勧誘で、私達三人程さんかく追いかけてくれた。二年生になるには、入部してしまえば、二年生になる。とすぐにバトンが移され、新三年生は引退私達三人には、必然的に部長等の役が定められ、初めはどうすることも出来なかつた。あわてて新入生の勧誘に必死になつた。二、三人、ハンドボールというものが他のスポーツに比べて余り知られていなかった。せいか、新入部員の勧誘が如何に困難であるか、その立場になつて始めて勧誘する人達の苦勞がわかり、ふと自分達の頃を思い出し、苦笑せずにはいられませんでした。こういう気持ちを出される事でありました。もう、とにかく私達の時代には、一チームにも福はない状態だった。技術上達そのものより、クラブ自体を継続していくだけで精一杯でした。なにしろ、三人の練習が、しぼしぼです。から華々しい対外試合等というものは、いくら思ひ出して、結局うとして、も導かんできません。時には雨の中、全く